



# 「ヒロシマ・ナガサキ」を問いなおす ～被爆 100 年に向けて～

高瀬毅

## ●被爆 2 世として生まれて

- ・ 1955 年長崎市生まれ 両親被爆 母・直接被爆 父・入市被爆
- ・ 母は原爆投下目標から 300 メートルの貯金局で仕事
- ・ 偶然が 3 つ重なって助かる
  - ① 当初の目標から北 3.4 キロ北の「浦上」に原爆が投下
  - ② 7 月末から 8 月初旬にかけ 3 回の通常爆撃(空襲)あり
  - ③ 原爆投下 1 週間前、貯金局全体が机の配置を窓際から奥へ
- ・ 両親が被爆者であることは、もの心ついた頃には聞かされていた
- ・ 母親の語る被爆の瞬間 強烈な印象 爆発時の光と音 子供なりに想像
- ・ 三人兄弟 私が小学生の頃、三番目の弟の白血球が急激に増えた
- ・ 母親が狼狽 「自分の被爆のせいでは」 結局ふつうの感染症  
しかし強く「被爆二世」ということを意識 恐怖を感じた最初の体験

---

## ●広島と長崎の違い

- ・ 長崎は、広島と並ぶ 2 つ目の被爆地 しかし同列の扱いではない
- ・ 広島が「兄貴分」 長崎は「弟分」
- ・ 長崎は広島を見ている 広島はあまり長崎を見ていない 「片思い目線」
- ・ 「劣等被爆都市・長崎」(元長崎大学教授 高橋眞司氏)

### 【被爆体験者】

- ・ 長崎だけの存在 被爆地域と被爆者援護対象地域のギャップ
- ・ 被爆者認定訴訟 9 月 9 日 一部原告だけ認める判決 長崎地裁
- ・ 2021 年「黒い雨訴訟」広島高裁判決から後退
- ・ 広島は認められ、長崎は認められない
- ・ 第 2 次「黒い雨訴訟」へも影響か

### 【平和記念(長崎は「祈念」)式典騒動】

- ・ イスラエルめぐり広島と長崎で分かれた対応
- ・ 「長崎市長を支持する」「よくやった」「毅然としている」等々が多い
- ・ 単純には喜べない どの国でも被爆地に招くべきというのが被爆地の普遍性

- ・一方で、ガザ「虐殺」の国には来てほしくないという感情も被爆者にはある
- ・今回、鈴木史朗長崎市長は外務省とも話し、それでも首をタテに振らなかった
- ・式典を混乱なく静粛に行いたい 本当はどうだったのか
- ・被爆者・市民の声を無視できなかつたと思われる
- ・被爆者団体の幹部

「自衛の域を超えたイスラエルの蛮行」「血塗られた国には来てほしくない」  
「招待するならせめて停戦すべき」

<起草委員会の存在と役割>

- ・毎年の市長の「平和宣言」起草委員会の存在大きい
- ・市民の声を反映させる 委員 15 人 3 回の会合 計 6 時間
- ・第 1 回の前に入れてほしい言葉、話などアンケートもとる
- ・起草委員会は、本島等元長崎市長の時(1979 年～1995)年に始まった

●広島に何が起きているのか-----被爆地の政治利用露骨に

- ・「はだしのゲン」「第五福竜丸」の平和教材からの削除
- ・G7 での「核抑止論」容認 広島ビジョン
- ・平和記念公園とパールハーバーの姉妹公園協定の締結
- ・今年の平和記念式典にイスラエル大使招待 長崎との違い
- ・松井一實市長の記者会見などでの言動

●問いなおし(学び直し・語りなおし)

### ① 被爆の全体像はいまだわからず

- ・「黒い雨」「被爆体験者」 被爆エリアの広がり把握できていない
- ・ABCC の集めたデータ 米国に
- ・原爆投下の全貌
- ・2 発投下したことの意味を深く考える必要がある

◇実験的意味

- ・広島と長崎の爆弾の違い 長崎の「成功」で核の量産可能に
- ・マンハッタン計画を完結させる
- ・人種差別 日本人に使用しても構わない

◇政治的意味

- ・戦後の覇権とソ連牽制

- ・長崎で「なければならぬ」という明確な理由は見つからない  
→現在と将来への警告と教訓を与えている

---

★長崎原爆の「爆撃航程」から見える「ナガサキ」

- ・全プロセスを追跡して見えるのは、余裕のない中で「放擲」に近い投下
- ・戦略的には、プルトニウム型爆弾の実戦投下に成功 作戦的には“失敗”
- ・広島原爆投下機「エノラ・ゲイ」機長、ポールティベッツは  
「広島はパーフェクトだった」と語っているのと対照的
- ・小倉は2度難を逃れる 5年後、朝鮮戦争の兵站の一大拠点として機能

★なぜ長崎原爆の爆撃航程にこだわるか。

- ・本当のことを可能な限り具体的に記録しなければ、なんでもありになる
- ・長崎原爆に関しては、陰謀論的な本が何冊かでている。
- ・長崎への原爆投下についてプロセスに「抜け」が多いため

## ②「ヒロシマ・ナガサキ」反核・平和の内実

- ・戦後一貫して確固たる「平和都市」だったのか
- ・1948年天皇の行幸 万歳の歓喜 広島市民熱狂 49年長崎
- ・1950年 朝鮮戦争勃発 「平和式典」中止 広島・長崎ともに
- ・朝鮮戦争のさなか、マッカーサー、「朝鮮半島に放射能のカーテンを」
- ・1954年ビキニ事件 第五福竜丸被曝  
日本人の反核・反米感情を抑え込むため「原子力平和利用博覧会」  
米合衆国情報局と読売、朝日、中日、中国など各紙共催
- ・ソ連の核をめぐる、反核運動分裂 原水協と原水禁に
- ・1975年 昭和天皇 広島で原爆投下について聞かれ「やむをえない」と発言
- ・2016年 オバマ大統領来広 歓迎ぶりと大統領のスピーチ
- ・G7サミットでの「核抑止論」容認 / 「はだしのゲン」の副読本からの削除
- ・広島平和記念公園とパールハーバーの姉妹公園協定 / イスラエル大使招待

## ③ 原爆被害と戦争加害の関係

- ・戦争の最終局面で起きた事件
- ・「先の大戦」の名称、いまだに日本人の中で共有できていない
- ・加害の歴史 アジア侵略・植民地化への認識が欠落している

- ・「太平洋戦争と原爆」という枠組み・被害に純化  
ex 長崎の平和宣言も以前よりその傾向強まっている
- ・米国の唱える「原爆正当化論」の中に組み込まれる 「真珠湾からヒロシマへ」
- ・軍都広島との断絶 過去の忘却と戦後の「平和」の独占
- ・被害についても限定的な範囲の認識 「黒い雨訴訟」「被爆体験者」
- ・放射能の被害を認めさせず 地域も限定的に意識づけられる
- ・他の戦争被害への想像力は？ 東京大空襲ほか都市空襲とその被害者
- ・アジアの死者への想像力の欠如と加害との関係の排除

#### ④ 核時代の本質-----原爆と原発の不可分な関係

- ・原爆と原発との関連 核原爆燃料サイクルへの執着の裏に潜在的「核武装」
- ・原爆と原発の切り離し 「フクシマ」との切り離し
- ・核実験被害者、原発被害者、労働者などの国民の想像力と意識の欠如
- ・「ヒロシマ・ナガサキ」で扉開いた核時代の全体像をどう認知できるか
- ・ヒロシマ・ナガサキ」が世界の「ヒバクシャ」といかに連帯できるか
- ・アジアに対する加害という言い方ではなく、  
アジアの「被害者」と日本の「被害者」という視点から  
とらえなおす必要もあるのでは 戦争「被害」

#### ●被爆 100 年へ向けて-----視点をすこし遠くに

- ・このままでは、「ヒロシマ・ナガサキ」のメッセージの力は弱まる  
※関東大震災時の朝鮮人(中国人・日本人も)虐殺 学会でも確定した事実  
しかし、虐殺はなかったという右派からの「歴史修正」の勢力が勢い  
そうした動きが出てきたのは、証言する人たちがいなくなってから
- ・政治的に都合のいい解釈がなされる すでにその兆候も
- ・そんな時代を想定して、喫緊の課題として、
- ・上記 4 点の問いなおし(学び直し・語りなおし)踏まえ、  
被爆地をもっと世界へと「開き」「つなげて」いくことではないか  
被爆地と世界の戦争、紛争との「連帯」をしていくこと  
原爆報道の語り方 あり方変える 被害一辺倒ではない視野で  
半分「歴史」となりつつある戦争の全体性を学ぶ

広島とパールハーバーが姉妹公園協定を締結

# 原爆の正当化 認めたことに

広島市の平和記念公園と米国のパールハーバー国立記念公園が姉妹公園になった。「戦争テーマパーク」、パールハーバーとの姉妹公園協定は何を意味するのか。この動きに、「広島が広島でなくなる」と恐れを抱く人も少なくない。

ジャーナリスト 高瀬 毅(写真も)

投げ入れられた小石が作る波紋は、やがて大きな波となつてはね返ってくるかもしれない。何かしら胸騒ぎのような、心ざわつく感覚が、いま広島市の被爆者や市民の間に広がっている。

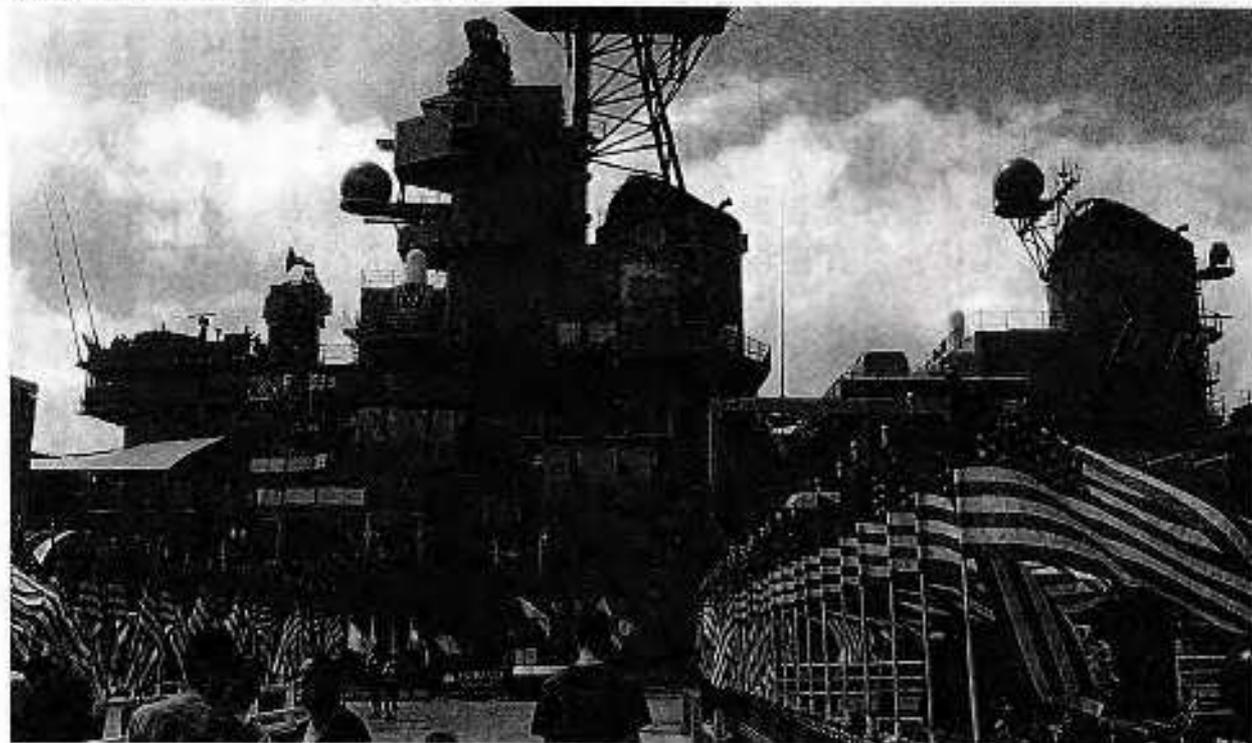
今年6月22日、米国ハワイ州パールハーバー国立記念公園と広島市の平和記念公園が「姉妹公園協定」を結ぶと、広島市が発表した。しかし当初、このニュースは地元中国新聞でもそれほど大きく取り上げられてはいない。ただ、長年、被爆の問題に取り組み、核廃絶を訴えてきた人たちには、あまりに唐突で、驚愕のニュースだった。

「最初知った時、ええ、何これです」  
二の句が辨げない。そんな口ぶりで語るのは、広島市を拠点に30年以上、国際協力や平和教育、文化交流などを行ってきたNGO「ANTHIEROshima」理事長の渡部朋子(69)。

「事前に市民に向けてなんの説明もなかった。なぜ広島市はこんなことを受け入れたのか。なぜここまで急ぐのか」。渡部は、中国新聞に、協定への疑問と、協定がもたらす危険について寄稿した。1956年、広島で原子力平和利用博覧会が開かれた。被爆者も含め地元はもろ手を挙げて賛成。それを機に核を拒絶する意識が大きく変わっていく。原発政策が推進され、半世紀のち、東京電力福島第一原発事故が起きた。渡部は、それと似た、何がしかの変化を強いる力が働いているのではないかと感じている。

原水禁正運動の先頭に立った故郷滝市郎の次女で、長年、広島で反核運動に力を注いできた春子(81)の懸念は深い。  
「協定を肯定する意見を新聞で読むのがつらい。このままでは広島が広島で

日本と連合国の降伏文書が調印された戦艦ミズーリ。見学のエントランスには何十本もの皇鳥旗がはためく。「華やかな日本」に輝くモニュメントであり、雰囲気は明るい



なくならないという恐れがものすごくあります」

広島市が出したプレスリリースに「戦争の始まりと終焉の地に関係する同公園」とある。始まりはパールハーバー。終焉の地は広島。この一節が意味するのは、日本軍の真珠湾攻撃で始まった米国との戦争が、原爆投下によって終結したということ。これは米園がかねてから主張している「原爆正当化論」だ。市の捉え方は米園の主張そのものと春子には映る。

「パールハーバーと平和公園は性格がまったく違う。だけど市は協定によって原爆正当化論を認めたことになる」

### 広島市外からも疑問の声 「現地調査した気配がない」

市の発表を受けて県内10団体でつくる市民団体「G7広島サミットを考えるヒロシマ市民の会」は、6月27日に、



市に締結を保留するよう申し入れをした。その中心的団体である広島県原爆被害者団体協議会（被団協・原水協）の理事長・佐久間邦彦も、原爆正当化を容認するような協定を認めることはできないと怒りを隠さない。

「米国が、大量殺りく兵器を使ったことを被害者は納得できない。戦争だから何をしてもいいということではないですから」

協定には、広島市以外からも疑問の声が上がっている。いち早く警鐘を鳴らしたのが、歴史学者で、高校教科書の検定意見をめぐり、教科書裁判を闘った琉球大学名誉教授の高橋伸秋。

「広島市側が協定締結を前に、現地調査を実施した気配がない」と指摘する。なぜなら、「広島市がパールハーバー国立記念公園の全体像を示す資料をいままもって公表できていないからだ」。

パールハーバーとはどういう所なのか。筆者は、この7月、パールハーバーを訪ねた。

オノルル市の最大のリゾート地域・ワイキキから西へ13キロ。車だと30分の距離。国立記念公園は、ビクターセンター、アリゾナ・メモリアル、戦艦ミズーリ、潜水艦ボーフィン号、USSボーフィン潜水艦博物館、太平洋航空博物館、ユタ記念碑、オクラホマ記念碑などで構成されている。日本のメディアでよく取り上げられるのは、湾の少し沖合にあるアリゾナ

・メモリアル。日本軍の爆撃で沈んだ戦艦アリゾナの船体が海面から見える。ただ、そこに行くには、ビクターセンターで数分間のビデオ視聴が必要だ。

日本軍の奇襲攻撃によって炎上するパールハーバーと煙煙を上げて沈んでいくアリゾナの映像などだ。日本人にとってははつらいが致し方ない。訪れた観光客は厳粛にならざるを得ない。

しかし、パールハーバーのメインはそこではないことを戦艦ミズーリに行ってみようと思ひ知らされる。5月9日2日、日本が連合国との間で降伏文書に調印したのはミズーリの甲板だ。日本の敗戦は、この日、正式に「決まった」のである。そんな「歴史的」なミズーリが係留されている埠頭までバスで移動するのだが、市内には軽快なハワイアン風のBGM。日本語で「現在、バスは戦艦ミズーリに向かっています」とアナウンスがある。日本人観光客の多さを物語っている。ただし周辺の撮影は禁止だ。パールハーバー全体は、あくまで米太平洋軍の基地だからだ。

### 戦争の悲惨さよりも 武力への信奉を示す展示物

ミズーリは威容を誇る。全長270メートル。最大幅33メートル。高さ60メートル。排水量5万3千トン。口径40・6センチの主砲が3砲塔9門、船

ミズーリ前にある「勝利のキス」像。第2次世界大戦勝利に沸くニューヨークで撮影され、雑誌「ライフ」に掲載された水兵と女性を像にした



体の大きさ、排水量、主砲の数と口径の規模は戦艦大和に準ずる。違うのは、トマホーク巡航ミサイル32基、ハーブーン対艦ミサイル16基を搭載していること。1944年に就役し、91年の湾岸戦争まで現役だったからだ。

数十本の星条旗がはためくエントランスを通り、ミズーリに乗船する手前には、水兵が金髪の女生を抱き、覆いかぶさるようにキスを交わす「勝利のキス」像がある。左手には「BATTLED S H O P」という名の売店。若い女性が上靴に力こぶを作り、「I can do it」と叫ぶイラスト入りの様々なグッズが並ぶ。力こそ最大の価値、女性も戦いに参加する」という意味が見て取れる。観光客も多く、アリゾナ・メモリアルと違い、場の雰囲気は一明るく「楽しい」。

見過ごせないのは、ミズーリの位置。アリゾナからわずか300メートルの



広島市の「被爆遺構」が保存で議論

# 「軍都」の記憶も

# 忘れたくはない

原爆が投下された広島市には、いまでも多くの被爆遺構が残る。平和都市としての面だけでなく、軍事都市としての顔もあらわにする。戦争の記憶をどう後世に伝えるか。市民の努力が続く。

ノンフィクション作家 高瀬 紘

「馬は三百匹、お前等は一銭五厘で轡をたててやってくる」

原爆ドームの前を流れる元安川から、本流の本川（旧太田川）に沿って500メートルほど上流。広島市中央公園の一角に、「馬神」と文字が刻まれた石碑が立っている。かたわらの説明板によると、「楠重兵衛第五連隊の兵営由南太田川沿いに昭和三年に建立」とある。冒頭の文章は、大隊同もない初年兵についての説明で、次のようにつづいていた。「古半兵に叱られ乍ら鍛えられ、然も、馬が先輩であり……」

自動車が発達していない時代、物の運搬は主として馬が担っていた。軍馬は、貴重な「活兵器」として大事にされ、初年兵より「格上」だった。

馬神から少し離れた同じ公園内で、今年6月、過去最大級の被爆遺構が見つかったことがわかった。旧陸軍の輸送部隊「中国軍管区糧軍兵補充隊（糧軍隊）」の施設跡だ。馬や自動車で、武器弾薬や食料の運搬・補給を担い、隊員はここから戦地へ赴いた。

遺構は旧日本軍の陸軍第五師団が置かれた広島城の西隣にある。1万4千

平方メートルのうち6千平方メートルを発掘し、原爆の基礎部分や馬の水飲み場、兵舎などを確認した。爆心地から1キロの距離にあり、400人以上が亡くなったとされるが、市の担当者には「いまのところ人骨は見つかっていない」と話す。この場所は戦後すぐに簡易住宅が建てられ、その後、公園として整備された。その過程で遺構は埋もれ、忘れられてしまった。

## 市民に忘れられた遺構 保存に向けて動き出す

「だから、あそこに遺構があるのを知っていませんでした。ガン！と頭をたたかれた感じでした」

そう語るのは、原水爆禁止広島県協議会（広島県原水禁）代表委員の金子哲夫。核廃絶運動に関わる彼ですら見

広島市が中心となって計画するリッカースタジアム。サンフレッチェ広島が本拠地を構える予定で、2024年の開業を目指している



落としていたくらいだから、多くの市民にとって輸送隊は遠い存在だった。遺構が見つかったきっかけは、サッカースタジアムの建設計画だ。J1の「サンフレッチェ広島」の新しい本拠地として2024年の開業をめざしている。市は遺構を調査した後、スタジアム建設のため撤去する方針だった。

これに対し、疑問の声が続出した。市民団体の「広島文学資料保全の会」（保全の会）は、「多くの人が亡くなっている遺構を市民に公開せず、撤去するのはおかしい」と、現地説明会の開催と遺構の保存を要望。広島県原水禁など他の市民団体からも要請が相次いだ。広島市長の松井一実は7月13日の会見で、「遺構の一部を何らかの形で保存活用する方向で検討できればと考えている」と述べ、24日、現地説明会を開き、市民64人が参加した。





広島県に所在する旧日本陸軍被服支廠跡。現在は広島県立広島女子大学（上）と広島県立広島女子大学附属図書館（下）が所在している。



広島県に所在する旧日本陸軍被服支廠跡。現在は広島県立広島女子大学（上）と広島県立広島女子大学附属図書館（下）が所在している。

遺構の保存を巡り、もう一つ大きな議論になっている建物がある。爆心から南東2・7キロにある旧日本陸軍被服支廠だ。

兵士の装備品を製造・保管していた施設で、軍服や軍靴、外装、下着、飯盒などがつくられた。兵站を担う重要施設として、戦前は東京に本廠（本館）、大阪と広島に支廠（支館）が置かれた。1990年代半ばまでは、建物の一部が広島大学の学生寮や、日本通運の倉

庫などとして利用されていた。

建物は4棟あり、3棟は広島県、1棟は国が保有する。現存する建物では日本最古級の鉄筋コンクリート造とされ、外壁はレンガが使われている。1棟の長さは約90×100メートルで、L字形に並ぶ。長辺の3棟が連なる長

さは東京駅の「赤レンガ駅舎」にほぼ匹敵する。

県が2018年に保有する3棟の耐震調査を実施したところ、震度6強で倒壊の恐れがあるとの結果が出た。そのため、19年12月、3棟のうち2棟を解体し、1棟は外観保存とする案を打ち出した。3棟すべてを保存・利活用するには耐震化に84億円が必要とされ、財政的に難しかったからだ。

これに対し、市民団体が建築、歴史の研究者は、「爆心から遠くまで歩くことでしか体感できないものがあり、3棟を保存してこそ意味がある」と全棟保存を訴えた。県のパブリックコメントには2444人から意見が寄せられ、3棟保存を望む声は6割強あった。与党の国会議員も動き出し、県は解体案を保留した。昨年、再度調べたところ、思いのほか強度があることが判明。コストも大幅削減が可能となった。

これを受けて県は今年5月、3棟の耐震化工事の方針を発表し、地元メディアは「保存へ踏みだす形となる」と報じた。ただ県経営企画チーム破産監の三島史雄は「耐震化は保存」ではないと言っている。利活用の仕方と重要文化財指定というハードルがあるからだ。

「有識者から重要文化財としての価値があると評価をいただいています。しかし指定されるための必要な資料をそろえられるのか、現状ではわかりません。利活用も何も決まっています。被服支廠が目玉されているのは、爆心地から5キロメートル以内に残る86の被爆建物の中でも最大級だ」という点



だ。爆心からやや距離があり爆撃でも破壊されなかった。そのため、被爆直後は大勢の負傷者が押し寄せ、「臨時救護所」となり、多くの被爆者が苦しみ、亡くなった。そういう歴史の現場であると同時に、「軍部広島」を物語る施設でもあるからだ。

### 建物があればこそ残る 軍需産業の記憶

もともと広島は、軍とともに発展した町だ。

広島城内には旧日本軍の陸軍第5師団が置かれ、大陸進出の拠点となった。日清戦争（1894〜95年）では大本営が広島城内に設けられ、明治天皇も移り住んだ。帝国議会を開かれ、伊藤博文や山縣有朋ら有力閣僚も市内に居住した。一時的に首都機能が移転したのだ。そんな地方都市は広島しかない。陸軍第5師団の基幹部隊だった第11連隊は、大陸進出の先陣を切った。被爆地としての象徴が原爆ドームなら、被服支廠



被服支廠で働いていたという切明千枝子さん。穴が開いて血や膿のついた軍服を洗い、洗濯でしのいでいたという。

赤レンガの外壁が特徴の旧被服支廠。被爆の影響がほぼなく、現在は広島大学の学生寮や民間企業の倉庫に転用された。



は、広島のもう一つの「軍都」の顔だ。

建設は1913年。多くの市民が働いていた。「陸軍の三廠」によると、シベリア出兵時の22年には、男工430人、女工850人の計1280人が動いていた。子供のころ被服支廠の近くに住んでいた被爆者の切明千枝子(91)は、当時を鮮明に覚えていた。

「朝、道路いっぱいになって通勤してくるたくさんさんの工員さんの、ザクザクという足音で目を覚ましよりましたね」と切明も学徒動員で、被服支廠へ働きに行っていたことがある。忘れられないのは43年のことだ。

「血や脂が付いて、あちこち穴の開いた軍服を補修するようになったんです。洗うと水槽に血が流れ出す。干してアイロンをかけて繕い、軍服として出す。こんなことで戦争に勝てるのかと思いましたね」

切明は、被服支廠のほか、銃火器や

弾薬などを製造・保管する兵器補給支

廠、人や馬の食料の生産、貯蔵をする糧秣支廠でも働いた。兵器補給支廠は、被服支廠の北東部に隣接し、少し離れた所に糧秣支廠があった。「三廠一の物資は、旧国鉄宇品線で宇品港(広島港)に運ばれ、兵士とともに、朝鮮半島や中国大陸の各部隊に輸送された。」

「広島は日清戦争から第2次世界大戦の敗戦まで、侵略戦争の出発基地でした。戦争のたびに全国から兵士が集められ、戦地へ出発していったのです」

そう語るのには、被爆前の広島を研究している「軍部広島」の共著者、清水肇宏。宇品には、30万人の部隊と1千隻以上の大型輸送船を有する船舶司令部があり、兵站を一手に担っていた。いまではこうした実態を知る市民は少ない。県会の公代表の土屋時子は私たちが被服支廠問題に取り組んでから、身近に感じられるようになってきたの

です」と話す。

土屋は昨年6月、被服支廠の保存活動に取り組み若者2人と「Dihorok Rishorラジオ」というインターネットラジオを立ち上げた。番組は1時間で月2回程度の放送。ゲストを招いて、被服支廠について建築、文学、芸術、歴史など様々な観点から話を聞く。

### 原爆ドームだけでは被爆は語り尽くせない

メンバーの一人で被爆3世のシンガー・ソングライター、瀬戸麻由は、講義の呉市出身。被服支廠のことは数年前まで知らなかった。

「まず巨大さに驚き、陸軍の力の大きさを初めて肌で感じました。被爆前の広島を想像できるようにになりました」

瀬戸は、被服支廠を切り口にいろいろなテーマで話ができている面白という。

広島を原爆ドームという「点」だけでなく、他の場所とつながった「線」や「面」で捉える必要があると言っているのは広島大学森戸国際高等教育学院特任教授の河西英通だ。

「被服支廠の保存ができれば、被爆樹木、被爆構架など、ばらばらに存在している被爆の記憶を結びつけ、「広島回廊」として、つなげることができま

す。被服支廠はその要衝なんです」

自らのシベリア抑留体験と広島市の原爆を生証し続けた広島の家、四國五郎は一時、被服支廠で働いていた。長男の光は、建物が広島市の二つの側面を持つていると指摘する。

「平和都市であること、明治以降の日本の侵略戦争を支えてきた軍都だったこと。この両面を体現している遺構は世界であそこだけ。多くの人が亡くなった所ですから、利活用は、戦争の記憶を継承するものでなければいけない」

被爆から76年を迎える広島。被害だけでなく、原爆投下につながった戦争と「軍都」の関係を見つめ直す機運が生まれ始めていることは確かだ。

四國光は言う。

「いま、原爆ドームを壊すことは考えられませんが、あれも戦後の一時期、なくしてしまえという話がありました。でも、時間が経たないとわからないことがあるんです。被服支廠も、残すことで生まれる価値があるはずですよ」

（記者 菅原 隆）

「人間の物語」をどう伝えるか

# 被爆者の体験 証言から継承へ

NBC長崎放送のラジオ番組「長崎は証言する」で、半世紀にわたって放送を続けてきた。被爆地メディアの使命感からだ。被爆者が高齢化し減少する中、新たな挑戦も始めている。

ノンフィクション作家 高瀬 敏

ズラリと並んだスチール製の箱に、厚さ1センチ余りの録音テープの箱が、びっしりと並べられている。箱の背には「谷口稔」―「秋月辰一郎」など長崎の著名な被爆者の名前が並ぶ。

NBC長崎放送（長崎市）別館10階のライブラリー。ここには、ラジオ番組「長崎は証言する」(旧「被爆を語る」)で放送した被爆者の録音テープがすべて保存されている。

放送開始は1968年。今年で50年になる。第1回は11月5日。今年11月17日時点での放送回数は3324回。登場した被爆者は約970人。放送回数と人数に差があるのは、被爆者1人の話を数回に分けて放送するためだ。取材では、被爆体験だけでなく、被爆前の日常や、被爆後から現在までの生活を丹念に聞き取る。1人あたり、最低でも数時間に及ぶ。番組は当初6分

ほどの長さで、週3回放送。いまは約5分に短縮され、週1回土曜日の午前6時40分から放送している。同局の記者は皆、一度は番組を担当する。ラジオ本部長の真高和博さん(53)は、91年に入社後すぐに担当となった。

「最初はカトリックの方。おばあちゃんのお話を聞いていたような、これは現実なのかという印象でした」

だが、取材を重ねていくうちに、原爆投下の決定過程や、なぜブルトニウム型の原爆だったのかなどわかっていないことの多さに驚かされた。「移しい犠牲者を出したのにどういふことなのか。怒りが湧き、関心が深まっていった。真島さん(のちに原爆をテーマにしたテレビドキュメンタリーを制作している)。

「被爆者の取材からスタートするので、調査報道でも被爆者の体験に軸足があ

NBC長崎放送のラジオ番組「長崎は証言する」で収録、放送した被爆者の声の約1千人分の録音テープ。放送開始から今年11月で50年。記録に入った被爆者も多い



る。記者は皆、見事にブレない。妙な方向には絶対に行かないんです」

真高さんはそう話す。

NBCでテレビニュースの取材なども合わせて1千人近い被爆者を取付した松山忠弘さん(80)の原点もこの番組だ。6年近く取材にのめりこんだ。

## 本人自身の肉声で録音収録 後代へ伝承する必要がある

「原爆がいかに非人道的か。人間が虫けらのように殺された。それを知らしめないといけないんだと、話を聞くなかで身に沁みていくわけです」

松山さんの心を動かしたのは、番組を企画した先輩記者、伊藤明彦さんの存在だ。

「被爆者の『声』の記録・無編集の保

存を主の、一部分の放送を従の目的とした作業。伊藤さんは、のちに自著『原

子野の「ヨブ記」で、企画の狙いをそう説明している。だが放送開始から約半年で後世保岡へ異動となる。引き継いだのが松山さんだった。松山さんはその時、伊藤さんの執念に触れた。

伊藤さんは入社してまもなく、ある高齢の女性を取付した。幕末から明治にかけて浦上で起きた最大のキリシタン弾圧「浦上四番崩れ」の最後の生き残りだった。数年後に亡くなった。「さ」いこの被爆者が地上を去る日がいつかはくる。その日のために被爆者の体験を本人自身の肉声で録音して、後代へ伝承する必要があるのではないかと。被爆地放送関係者の歴史にたいして負う責務ではないか。この作業にさいしよに示唆をあてたのはおばあさんの

死です」(『原野の「ヨブ記」)

執念の裏まじさを物語るのが担当を外れた後だ。70年、NBCを退社。退職金で購入した録音機を肩に、北海道から沖縄まで被爆者を訪ね、取材を始めた。日中でも目の差さないアパート暮らし。早朝は肉体労働、夜は飲食店で働き、昼間取材に歩く。8年間で1千人の「声」を収録。2千人に取材を申し込み、半数に断られた。

## 被爆2世も核の被害者 伝えていく必要がある

筆者は80年に初めて東京で伊藤さんに会っている。木造アパートの6畳一間にオープンリールのデッキをテンと置き、ハサミと接着用テープを手にも、録音テープの編集に没頭していた。収録した「声」の中から特に印象的な話をカセット(一部オープンリール)にし、89年から92年にかけて、公共図書館、大学・高校の図書館など計944カ所に、1万3千余巻を寄贈。1千人の「声」を元に、広島被爆前日の15年8月5日から9月初旬に至る約1カ月の出来事を、284人の被爆者の「声」で構成する壮大なドキュメンタリー「ヒロシマ ナガサキ 私たちは忘れない」を制作。CD9枚を1セットとして全国の公共施設に納めた。それが2006年。記者時代の32歳で自ら企画した番組「被爆を語る」から38



長崎県立大学で記者になった松山忠弘さん(80)は、この番組の原点だ。6年近く取材にのめりこんだ。

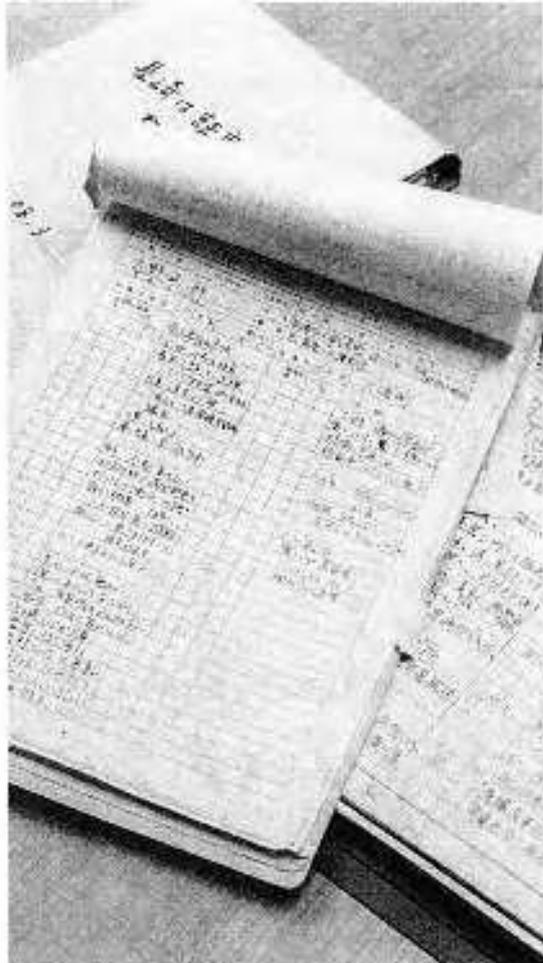
年。伊藤さん、70歳の年だった。この間も、NBCの番組は後継の記者たちによって引き継がれてきた。現在の担当、米村仁十記者(77)はこう話す。

「被爆者が少なくなり、苦労はあります。それでも番組をやめてはいけません。という共通認識が現場にはあります」

志は受け継がれている。とはいえ被爆者の高齢化と減少で、新たな対応を迫られていることは確かだ。NBC記者時代、原爆取材の第一人者で、いまはフリーランスとして活動している関口達夫さん(68)は、「また伝えるべきことはある」と断言する。その一つが被爆2世の問題だ。若くして白血病などで亡くなったたり、健康不安、差別などに苦しめられてきたりした。

「国は遺伝的影響がないという。しかし動物実験では証明されていて影響を否定できない。そうである以上、そのことを伝えていく必要があります」

2世の団体「全国被爆2世団体連絡協議会」(二世協)は88年の結成以来、



収録、放送した被爆者の名簿。原爆、被爆した場所、被爆時の職業、居住地からの距離、被爆後から録音時までの経緯など、録音内容の要点を記載している。地道な作業の積み重ねが歴史を後代へと継承することにつながる



被爆者援護法に基づく援護を求めてきた。だが国は法の適用対象としていない。二世は17年2月、適用を求めて集団訴訟に踏み切った。二世は現在全国に30万、50万人とみられているが、正確な数は不明だ。国は一度も実態調査をしていない。二世は、15、17年とスイス・ジュネーブの国連欧州本部の人権理事会を訪問。18年春には、同本部での核拡散防止条約(NPT)再検討会議第2回準備会合に代表団5人を派遣した。メンバーの一人、崎山昇会長(60)は、現地で強く実感したことがある。

4世も積極的に継承活動を始めている。その一人、長崎市の原田小鈴さん(44)、広島と長崎で「二重被爆」した山口薫さんの孫娘だ。学校や地域の学習会などで祖父の体験を話している。山口さんが10年に90歳で他界。長崎大学の教授から原田さんに3世としての話を依頼されたのがきっかけだ。

「最初は、被爆体験もなく、語れることはありませんとお断りしました。でも3世だからこそ伝わるものがあるのでは、と言われて引き受けました」

山口さんの体験が稀有なだけに関心も高い。しかし中には「被爆体験がないので気持ち伝わりません」「あなたに来て何を話すの」という反応もあった。それでも、多くの人たちから求められ、祖父の体験を語り継ぐのが自分の使命という気持ちになっていったという。そんな原田さんを傍らで見ている4世の晋之介君(12)も、紙芝居を使って人前で話をするようになった。

「自分にとっていい経験になるかなと思っただけから。(小学)1年生の時、平和学習があり、お母さんがやっていることはいいことなんだと感じました」

「その時」のことを絵にする  
大なり小なりの「追体験」

被爆を体験していない人が、どのように継承すればいいのか。立教大学社会学部的小倉謙彦准教授(49)は、個人の人生の全体性に接近する「ライフストーリー」という観点から、継承の可能性を提示している。継続的に研究している事例がある。広島市立基町高校の高校生たちだ。同高では07年から、生徒たちが被爆者の話を聞いて絵を描く取り組みが続いている。PC画像で何枚か見せてもらったが、「涙み」に圧倒された。生徒たちは被爆者に半年から1年間ほどかけて、何度でも会う。「その時」のことを絵にするためには、詳細を聞く必要があるからだ。小倉准教授は、半年間生徒たちに伴走してインタビューを重ね、「非被爆者にとっての(原爆という経験)」という論文にまとめた。そこには、一人の被爆者と向き合うことが、どれほど重い体験なのか、次のように記述されている。

「被爆者の気持ちになって考え、自分の作面意識を相対化しながら描いていかなければならない。しかもそこで描くのは、想像を絶するつらい体験である。何度も筆が止まり、描き直し、夜うなされながら、泣きながら描いたという高校生もいる」

しかし脱落した生徒は一人もいない。興味深いのは、「この取り組みの中で高校生たちは大なり小なり『追体験』をする」ということだ。対話を重ねていくうちに高校生たちの中に、被爆体験を能動的に探り、感受する変化が生まれてくるというのだ。被爆者の記憶も対話を通じて引き出され、「共同生成していく」。肉声によるオーラルヒストリーの力を実感させる話だった。

「長崎放送の証言も、高校生が被爆者の体験を伝えたいと思うのと同じように、聞く人を魅了し、感銘させるものがあると思います」(小倉さん)

伊藤さんが収録した被爆者の話はいま、インターネットのサイト「被爆者の声」で聴くことができる。前述の「ヒロシマ ナガサキ 私たちは忘れたい」のほか、ビデオ版265人の話も収録している。CDや映像記録の一部には英語版もある。サイトの管理を担当する古川義久さん(64)によると、伊藤さんは、米ロ英仏中の核保有国各国の言語による発信もしたいと語っていた。しかし匆忙、急逝した。享年72。

「伊藤さんの残した音声記録は被爆からあまり時間が経っていない時の録音なので、迫力がある。こういうものを今後に生かしてほしいですね」(古川さん)

証言から継承へ。私たちは時代の転換期に立っている。被爆から73年が経ち、この間に収録された膨大な「人間の物語」を、それをどう次代につなげ、世界に伝えていくのか。唯一の戦争被害国日本の私たちに課された責任だ。

## ◎長崎からの報告

元長崎放送記者

関口達夫

### 1 自己紹介

1950 年熊本県生まれ

1974 年長崎放送入社

1986 年から 2016 年退職するまで原爆、平和報道を第一線で担当。

退職後、安倍政権の言論統制に抗議するためマスコミOBらと言論の自由と知る権利を守る長崎市民の会を結成。安保法制違憲訴訟に原告として参加した。

### 2 かつて広島市の平和行政は、長崎市をはるかに凌駕していた

平和首長会議は、広島市長が会長を務め、166 カ国約 8400 の都市が参加している。この会議は、1982 年当時の広島市長が提唱し、設立された世界平和連帯都市市長会議の名称が変わったもの。この会議は、広島、長崎両市が世界に呼びかけたことになっているが、長崎市は、広島市の構想に乗っかっただけ。

### 3 1990 年から長崎市の平和行政が注目され始めた

①1988 年、当時の本島等市長は、議会で昭和天皇の戦争責任に言及。

90 年から平和宣言で日本のアジア・太平洋戦争の加害責任を指摘、外国人被爆者に日本人被爆者と同等の援護を求めるようになった。天皇の戦争責任発言を支持する署名活動を展開したのは、1980 年代から 活発に活動をしていた学者を含む様々な市民団体だった。平和宣言での日本の加害責任指摘にはこれらの市民団体の影響もあった。

②2014 年と 2015 年、田上富久市長は、平和宣言で集団的自衛権行使容認と安保法制について政府と国会に慎重審議を求めた。

この平和宣言に大きな影響を与えたのは、起草委員で長崎県 9 条の会共同代表などを務めた元長崎大学学長土山秀夫さん。

#### 4 今年、鈴木史朗市長は、平和祈念式典にイスラエルを招待しなかったことで注目を集めているが、信念に基づいた判断だったのか

①招待しなかった理由は、「平和祈念式典に抗議デモなど不測の事態を避けるため」と市長は、主張するが、本音は、はっきりしない。

②平和宣言の当初の案には「核保有疑惑国イスラエルによる大きな戦闘が継続されている」と書かれていたが、最終の平和宣言では「中東の武力紛争」と修正され、イスラエルの文字が削除された。市長は、修正した理由について「個別具体的に書くと色々な評価がされ、訴えたいことが霞む」と説明したが、「ロシアによるウクライナ侵攻に終わりが見えず」と個別具体的に書いている。イスラエルを招待しないので平和宣言でイスラエルに言及するとアメリカや日本政府を刺激すると考え、削除したのではないか？

#### 5 平和宣言での広島と長崎の違い

例えば、今年の平和宣言で広島は、G7による広島ビジョンについて核抑止論に基づいていることをダイレクトに批判しなかったが、長崎は、核抑止論に立っていることを批判した。

#### 6 平和宣言の作り方の違い

広島は、平和宣言に関する懇談会（市長を含め8人）の協議を踏まえ市長が書く。途中経過は、公表しない。

長崎は、平和宣言起草委員会（市長を含め15人）が3回開催され、毎回公開される。マスコミが取材し、市民も傍聴可能。

委員は、核兵器廃絶を研究する長崎大学教授ら学識経験者、被爆者団体代表、平和活動に取り組む若者、長崎新聞取締役編集局長ら。保守派も1人参加。

1回目は、各委員に今年の宣言にどんなことを盛り込むべきか、意見を出してもらう。2回目にその意見をもとに長崎市が宣言の素案を示す。

これに対して各委員が修正の要望を出す。3回目に修正した宣言案を出し、各委員が更に意見を述べる。それをもとに長崎市が最終案を作成する。

長崎市が示す素案は、日本政府に付度し、遠慮した表現が多いが、委員の批判を受けて一部修正されるため外部からは広島より評価される場合もある。

## 7 長崎の平和宣言には問題も多い

①2014年、15年には集団的自衛権行使容認と安保法制について政府と国会に慎重審議を求めた。

理由は、「原爆は、戦争の過程で投下された。その日本が、安保法制によって再び戦争をする国になろうとしていることについて警鐘を鳴らす必要がある」ということ。しかし、この宣言について安倍派に所属する長崎県出身の国会議員から市長に圧力が加かった疑惑があり、翌年から日本の軍備増強、戦争準備の動きについて言及しなくなった。今年もしかり。

②今の市長になってから憲法9条について表現がトーンダウンしている。

前市長の時は、「戦争をしないと決意した憲法を持つ国として平和外交を展開して欲しい」など戦争をしないことを政府に求めていた。しかし、今の市長になってからは「憲法の平和の理念を堅持する」とトーンダウンし、「戦争をしない」という表現を削除した。

日本政府が軍事力を強化し、アメリカと一緒に戦争する体制を構築していることや自民党、一部野党の改憲を求める声の高まりに忖度しているのではないか。

③今年、「広島、沖縄との連帯、放射能の被害を受けた福島への支援」という表現が、初めて削除された。

2011年の福島原発事故以降、同じ放射線の被害を受けた福島への支援、応援は、毎年表現していた。このフレーズを削除することに平和宣言起草委員から反対の意見が出されたが、鈴木市長は、押し切った。

鈴木市長は、削除した理由について「地球全体に呼びかけるので個別の都市名は入れなかった」と説明した。しかし、広島、沖縄との連帯、福島への支援は、戦争をしない、核兵器廃絶を進める上でプラスになる。その上で地球全体に呼びかければメッセージの強さが増すはず。福島を削除した本当の理由は、日本政府が、原発再稼働、新たな原発の建設などを打ち出していることに忖度したのではないかとの見方もできる。鈴木市長が、来年以降も福島を削除するのであれば市民団体としてその理由を質し、復活させるよう求める必要がある。

④平和宣言起草委員会の委員は、長崎市が委嘱する。

集団的自衛権行使容認と安保法制に反対した大学教官ら2人は、交代させられ

た。もし、市長が、自分の意向に沿う委員を増やせば平和宣言の内容は大きく後退する恐れがある。

## 8 平和行政も問題が多い

長崎原爆資料館の原爆投下に至る侵略の歴史を展示したコーナーの見直しが行われており、縮小される恐れがある。

この加害展示コーナーは、1996年現在の原爆資料館が建設された時、原爆の被害だけを展示しても日本の侵略や植民地支配を受けたアジアの国々の人々に核兵器廃絶の訴えは届かないとして当時の市長らの考えで設置された。

展示見直しの発端は、2019年保守派の市民団体の意を受けた市議員が加害展示コーナーの「南京大虐殺事件起こる」という展示について「南京大虐殺はなかった」として展示の修正を求め、長崎市が「検討する」と答弁したこと。

その後、原爆資料館の展示のあり方を検討する審議会（学識経験者や市議員、被爆者らで構成）で展示の見直しについて論議が始まり、歴史学者や国際政治学者らも含めて検討が行われた。

去年見直しの基本方針が策定されたが、加害には触れるものの多角的な視点で未来志向の展示を行うという方向性が打ち出された。

展示見直しについて私たちの団体をはじめ被爆二世や被爆教師の会、マスコミの労働団体など21団体は、原爆投下に至る日本の植民地支配やアジア侵略の歴史を伝えなければ核兵器廃絶の訴えは、世界に届かないとして長崎市に加害展示コーナーを継続するよう再三にわたって申し入れを行っている。

しかし、長崎市は、小学生や大学生、市民の意見を聞くなどして加害展示を薄める方向に持って行こうとしている。今年度基本設計を行い、来年度実施設計を行う予定。

この問題は、広島市の小学校の平和教材からはだしのゲンが削除された問題と同じ構図。NHKのクローズアップ現代は、保守系の団体が市教育委員会に削除を求めたと報道している。

長崎市も展示見直しの発端は、保守派の市民団体、議員の長崎市への圧力だ。

原爆資料館の加害展示を縮小、薄めることのもう一つの問題点は、日本の負の歴史を人々に伝えない結果を招くこと。

日本では、今、中国や北朝鮮の脅威を煽り、軍事力を強化してこれらの国々に対抗し、戦争ができる体制を構築している。しかし、日本が、かつてこれらの国々を侵略、植民地支配をし、大きな被害を与えた歴史を学べば、同じ過ちを犯さないために対立と戦争ではなく協調と外交による解決を目指すようになるはず。

## 9 広島は次は長崎が攻撃的になるのではないか

広島で今起きている様々な問題は、核兵器と核の傘で中国、北朝鮮に対抗しようとしているアメリカと日本政府の政策に反対しない広島、日本の戦争準備に反対しない広島につくり変えるためという意見がある。

そうだとすれば、広島を黙らせた次に標的になるのは、被爆地長崎ではないか？

## 10 私たちは、どのように対抗すべきか

広島だけ、長崎だけでの闘いでは限界がある。まず、広島、長崎の市民が相互に支援、協力する。その輪を沖縄、岩国、横田、三沢など有事にアメリカの核攻撃の出撃拠点とり、反撃によって甚大な被害を受ける恐れのある都市に広げていく。中国などとの戦争が発生した場合、自衛隊の基地がある都市も反撃を受け、市民が大きな被害をこうむる。これらの地域の市民とも連携していくべき。時間と労力が必要だが、それ以外に状況を変える方法はないのではないか。

## 「被爆地」で何が起きているのか

2024年9月15日

広島在住フリーランス（元朝日新聞）記者

宮崎園子

### 1. 「被爆地」とわたしの立ち位置＝ルーツはあるけどどこか引いた目で見ている

- ・祖父母は広島被爆者、しかし県外・海外育ち
- ・地元紙ではなく全国紙の広島駐在、からの広島でフリーランスに

### 2. 広島を通して見える長崎

- ・（核兵器禁止条約採択の1カ月後の2017年平和宣言での、日本政府への要求

8月6日 平和宣言（一部抜粋）

今年7月、国連では、核保有国や核の傘の下にある国々を除く122か国の賛同を得て、核兵器禁止条約を採択し、核兵器廃絶に向かう明確な決意が示されました。こうした中、各国政府は、「核兵器のない世界」に向けた取組を更に前進させなければなりません。

特に、日本政府には、「日本国民は、国家の名誉にかけ、全力をあげてこの崇高な理想と目的を達成することを誓う。」と明記している日本国憲法が掲げる平和主義を体現するためにも、核兵器禁止条約の締結促進を目指して核保有国と非核保有国との橋渡しに本気で取り組んでいただきたい。

8月9日 長崎平和宣言（一部抜粋）

核兵器を、使うことはもちろん、持つことも、配備することも禁止した「核兵器禁止条約」が、国連加盟国の6割を超える122か国の賛成で採択されたのです。それは、被爆者が長年積み重ねてきた努力がようやく形になった瞬間でした。（中略）

日本政府に訴えます。

核兵器のない世界を目指してリーダーシップをとり、核兵器を持つ国々と持たない国々の橋渡し役を務めると明言しているにも関わらず、核兵器禁止条約の交渉会議にさえ参加しない姿勢を、被爆地は到底理解できません。唯一の戦争被爆国として、核兵器禁止条約への一日も早い参加を目指し、核の傘に依存する政策の見直しを進めてください。日本の参加を国際社会は待っています。

- ・平和宣言の中で、誰を「仲間」と認識しているか

広島：「被爆地長崎、そして思いを同じくする世界の人々と共に力を尽くす」

長崎：「長崎は、広島、沖縄、そして放射能の被害を受けた福島をはじめ、平和を希求するすべての人々と連帯し」（2023年まではこの表現）

・平和宣言の作り方の違い＝平和宣言は誰が作るのか

広島：「平和宣言に関する懇談会」出席者は有識者ら、半数以上は市政関係者、非公開（取材は冒頭市長挨拶のみ頭撮り、終了後市長囲み取材）、議事録は情報公開請求による開示のみ（黒塗りあり）

長崎：「平和宣言起草委員会」委員には若者も、全面公開、傍聴席あり、1 週間ほどのちに長崎市 HP に審議内容をアップ

・平和記念式典と平和祈念式典の違い＝式典は誰のもの

広島：司会は広島市職員、被爆者の挨拶なし

長崎：司会は地元高校生、被爆者の挨拶あり

・原爆の表現＝どこ目線で語るか

広島：原爆投下、午前 8 時 15 分は「投下」時刻

長崎：原爆落下、午前 11 時 2 分は「炸裂」時間

・「被爆地」の表現

広島：「世界最初の原子爆弾の惨禍を経験」した地（広島市の表現）＝揺るがない事実

長崎：「長崎を最後の被爆地に」（長崎市の表現）＝守らなければならない目標

・発信力

広島市長：SNS で自ら発信しない

長崎市長：SNS で自ら発信する（X=旧 Twitter、Instagram、Facebook）

### 3. 2024 年の平和式典が浮き彫りにした広島と長崎の違い

イスラエルの扱いよりも、パレスチナの扱いに注目。日本政府が国家として承認していないパレスチナも 10 年前から招待してきた長崎と、国家であるか否かを判断基準にしてきた広島。2022 年、ロシアの扱いについては広島長崎ともに、外務省の意向に沿って不招待としたが、これがそもそもの間違い。その前提に基づいて、イスラエルを招待することの整合性を検討した長崎と、国が何も言っていないから漫然と例年通り招待した広島。この差はなんなのか。

### 4. 「怒りの広島、祈りの長崎」はいま

2017 年、長崎での「被爆者団体から要望を聞く会」で、被爆者代表の男性が首相に「あなたはどこの国の総理ですか。今こそ、あなたが世界の核兵器廃絶の先頭に立つべきです」と詰め寄った。2024 年の「被爆者団体から要望を聞く会」でも、長崎では「被爆体験者は被爆者じゃないんですか。弱い人の声が聞こえないんですか」と被爆 2 世の男性が声を上げた。シャンシャンと形式的に会が終わる広島と、声を上げる長崎。怒ってい

るのはどちらだろうか。

2016年のオバマ米大統領（当時）訪問も、2023年のG7サミットも、長崎は蚊帳の外となった。オバマ氏が原爆慰霊碑の前で、「空から死が降ってきた」と原爆を他人事のように語ることを許し、サミットでは、核保有国と核の傘国ばかりのG7首脳が、「核兵器は安全保障上の役割がある」などと核抑止論を堂々と主張することを許した広島に、もはや「怒り」は見出せない。

式典での「怒り」の声を封じ込める広島市の姿勢についてはいうまでもない。

## 5. 被爆100年に向け、「平和報道」「原爆報道」を再考する

### ・「平和報道」「原爆報道」って何？

現実には「被爆体験継承報道」ではないだろうか。それでいいのだろうか。「ハチロク」の根掘り葉掘りだけでいいのだろうか。原爆報道を超えて、もっと多様なナラティブの「平和報道」が必要では。報道する側の工夫が足りないから、マンネリ化した「8月ジャーナリズム」への批判に繋がっているのではないだろうか。

### ・「特殊性」と「普遍性」のバランスを欠いていないか

社会部的なアプローチだと、いかに悲惨なことが起きたか、いかに他の戦災被害と原爆被害とが異なるか、という、「被爆地」の特殊性にばかりフォーカスしがち。だが、それでいいのだろうか。普遍的な戦争という根本に立ち返り、今の社会構造とも重ねて、遠くの人たちが「我がこと」として感じ入ることができるような視点も必要ではないだろうか。工夫が問われるところ。

### ・遠い過去と、崇高な目標の「間」がない

1945年8月6日に何が起きたかは、80年経とうとする今も未解明な部分が多い。そこを掘り下げる中国新聞の「ヒロシマの空白」のような企画は素晴らしいと思う。世界に目を向け、核兵器廃絶という、気が遠くなるような未来の目標を見据えて世界の動きを報じ、現在の課題を提起することも大事だと思う。だが、「今を生きる私たちの足元で今、起きている私たちの街の課題」をスルーしすぎていないだろうか。

### ・全国メディアに足りない視点

記者が転勤で2、3年ごとに入れ替わる全国メディアには、立脚点を明確にできる地元メディアと違って、「被爆地」の長い歴史もその変質も気づける視点に乏しい。加えて、「わがまち」という意識を持って腰を据えて取材する記者は残念ながらほとんどおらず、どこか傍観者のような視点となっていないか。あえてきつい表現をするならば、「ハチロク」が取材のネタになってしまっていないか。そして広島を「聖地」化していないだろうか。結果、「被爆地」「平和都市」のありようを問う姿勢が足りないのが現実。このままでいいのだろうか。

以上